

2023年度 第2回 瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し（2023年7月～8月）のポイント

(1) 概要：

シラスの漁獲量は平年並みか平年を下回る。

カタクチイワシ（小羽から大羽）の漁獲量は平年を下回る。

(2) 海域別：

紀伊水道東部のシラスは好漁であった前年を下回り、平年並み。

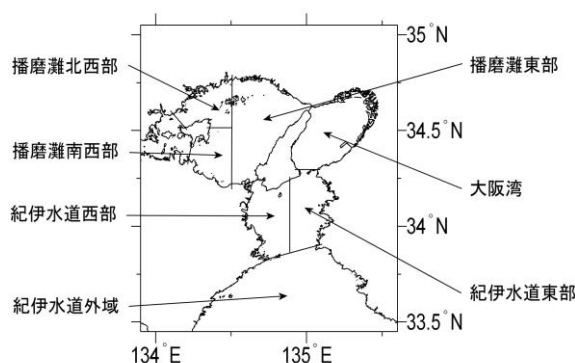
紀伊水道西部のシラスは好漁であった前年、平年を下回る。

大阪湾・播磨灘南西部のシラスは不漁であった前年を下回る。

播磨灘東部のシラスは不漁であった前年を上回り、平年並み。

播磨灘北西部のシラスは不漁であった前年並み。

大阪湾のカタクチイワシは平年並みであった前年を下回る。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：企画調整部門（横浜） 上原

浮魚資源部（廿日市） 船本、河野

電話：0829-55-0666、ファックス：0829-54-1216

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/>

2023年度第2回瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

1. 今後の見通し（2023年7月～8月）

シラス（本年夏季発生群）

紀伊水道東部では好漁であった2022年を下回り、平年並み。

紀伊水道西部では好漁であった2022年、平年を下回る。

大阪湾・播磨灘南西部では不漁であった2022年を下回る。

播磨灘東部では不漁であった2022年を上回り、平年並み。

播磨灘北西部では不漁であった2022年並み。

標本漁協、もしくは標本船のシラス漁獲量を各海域の指標とした（図1～図3）。

カタクチイワシ（小羽から大羽）

大阪湾では平年並みであった2022年を下回る。

標本船の漁獲量を指標とした（図4）。

2013年～2022年の平均値を平年値とした。

2. 漁況等の経過（2023年4月～6月）及び今後の見通し（2023年7月～8月）についての説明

(1) シラス漁況

紀伊水道東部（和歌山県側）では5月の漁獲量は前年の38%、平年の17%であった。

紀伊水道西部（徳島県側）では5月の漁獲量は前年の50%、平年の23%であった。

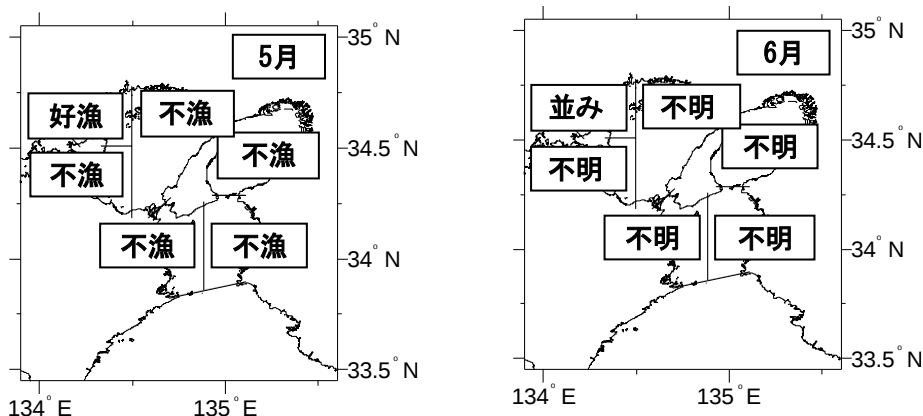
大阪湾（大阪府）では2023年の漁は4月から一部の船が出漁したものの、本格的な漁は5月9日から始まった。4月の漁獲量は前年の60%、平年の2%、5月の漁獲量は前年の36%、平年の26%であった。5月末に大阪湾で発生したと推測される群の加入がみられている。

大阪湾（兵庫県）では2023年の漁は前年同様、5月9日から始まった。5月の漁獲量は前年の23%、平年の20%であった。

播磨灘東部（兵庫県側）では2023年の漁は前年より1日遅い6月1日から始まり、5月は漁獲量がなかった（前年0トン、平年77トン）。

播磨灘南西部（香川県側）では5月下旬から漁期入りしたが魚影がみられず、5月は操業が行われなかった（前年0トン、平年9トン）。

播磨灘北西部（岡山県側）では2023年の漁は前年より1日遅い5月27日から始まった。5月の漁獲量は前年の30%、平年の195%であった。6月の漁獲量（6月1日～15日までの合計）は前年の170%、平年の114%であった。



2023年5月～6月のシラス漁況

(2) 産卵量と稚仔量

大阪湾では5月の産卵量は前年の14%、平年の31%、6月は前年の35%、平年の45%であった。5月の稚仔採集数は前年の60%、平年の42%、6月は前年の163%、平年の90%であった。播磨灘では6月の産卵量は前年の51%、平年の71%であった(図5)。播磨灘東部では前年の134%、平年の153%、播磨灘北西部では前年の19%、平年の20%であった。播磨灘南西部では6月の産卵量は前年の0.1%、平年の0.2%、稚仔採集数は前年の3%、平年の5%であった。

(3) 黒潮流路の現況と今後の予測(2023年7月~8月)

6月13日現在、黒潮は室戸岬沖で著しく離岸し、大蛇行流路となっている。各岬における黒潮離岸距離の変動傾向と水産研究・教育機構運用の海況予測システムFRA-ROMSⅡによる予測結果、及び最近の黒潮流路の推移等を併せて考慮すると、黒潮は一時的に紀伊水道沖に接近するものの、概ね離岸傾向で推移すると予測される。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972): 海洋物理Ⅱ、東海大学出版会を参考にした。

(4) 今後の見通し(2023年7月~8月)

シラス(本年夏季発生群)

本漁期に黒潮は離岸傾向で推移すると予測されており、今後、外海発生群の漁獲はあまり見込めない。

紀伊水道東部では外海発生群及び内海発生群が漁獲されていると推察されるが、今後の漁況は主に内海発生群に左右されると思われる。本海域における5月のシラス漁は低調であった。また大阪湾での6月の産卵量は2022年、平年を下回っているが、稚仔採集数は平年並みであった。これらの状況から判断すると好漁であった2022年を下回り、平年並みと考えられる。

紀伊水道西部でも外海発生群及び内海発生群が漁獲されていると推察される。カタクチイワシの成魚を対象とした漁が低調であることから親魚は多くないと考えられ、好漁であった2022年、平年を下回ると考えられる。

大阪湾では外海発生群が春から引き続き漁獲されるのに加え、内海発生群が6月以降にシラスとして漁獲されるようになる。大阪湾での産卵量や稚仔採集数から判断すると不漁であった2022年を下回ると考えられる。

播磨灘東部では内海発生群が漁の主体であり、6月の水温が低いほど7月~8月の漁獲量が多くなる傾向がある(図6)。6月の産卵量は2022年、平年を下回っているが(図5)、播磨灘全体での水温は平年並みである($-0.5^{\circ}\text{C} \leq \text{平年値との差} \leq +0.5^{\circ}\text{C}$)。したがって不漁であった2022年を上回り、平年並みと予測される。

播磨灘南西部も内海発生群が漁の主体である。6月の産卵量や稚仔採集数から判断すると、不漁であった2022年を下回ると考えられる。

播磨灘北西部も内海発生群が漁の主体である。6月の産卵量から判断すると、不漁であった2022年並みと考えられる。

カタクチイワシ(小羽から大羽)

大阪湾では漁期当初に2022年発生1歳魚、その後は2023年の春シラス漁で漁獲の対象となった0歳魚が小・中羽として漁獲される。2023年の春シラス漁は2022年や平年を下回っており、加入量は2022年や平年より少ないと推察されことから、平年並みであった2022年を下回ると考えられる。なお近年、夏季はマイワシを主体に漁獲していたが、2022年はカタクチイワシ主体の漁獲であった。

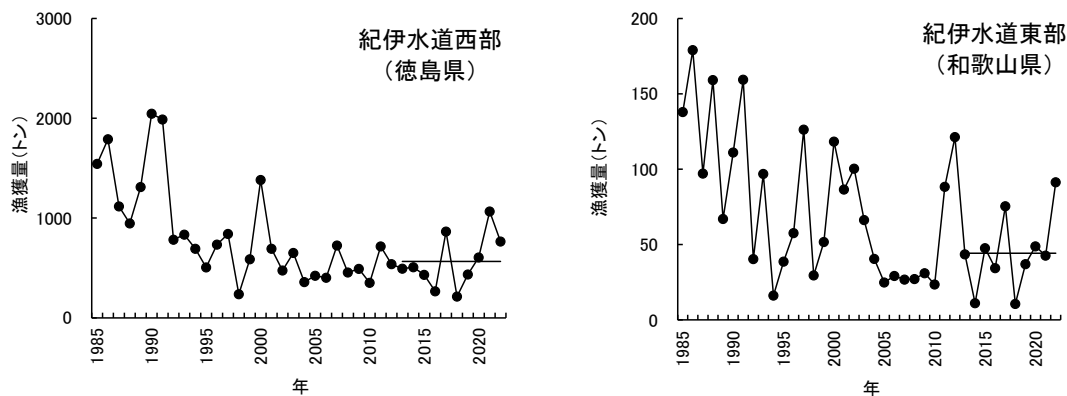


図1 紀伊水道の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

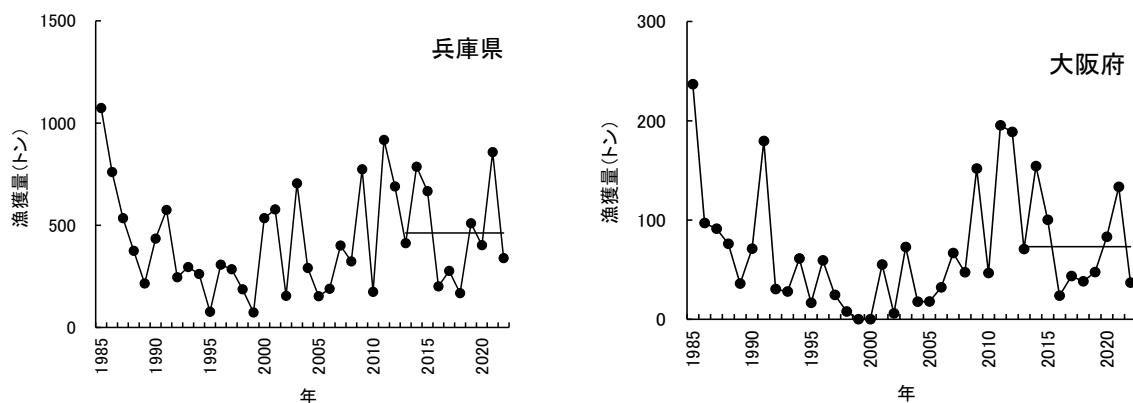


図2 大阪湾の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

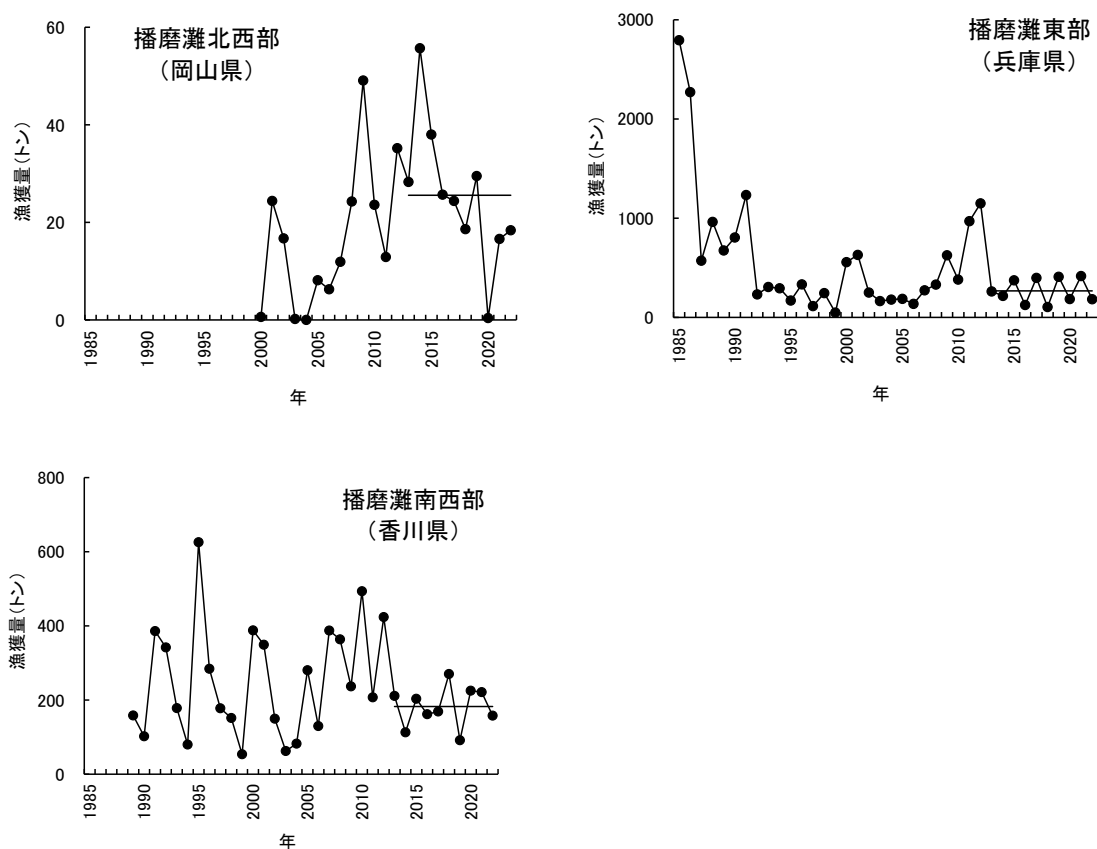


図3 播磨灘北西部の標本船、東部及び南西部の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

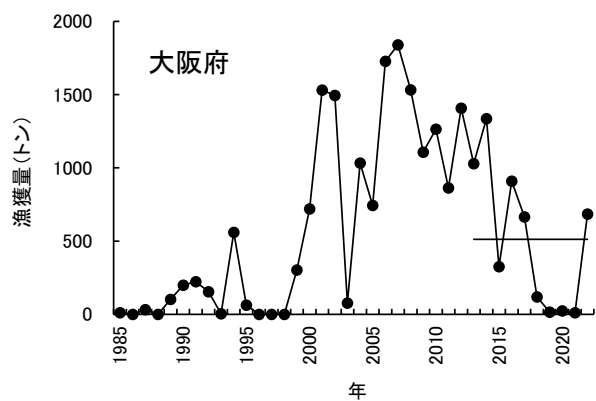


図4 大阪湾の標本船における7月～8月のカツチイワシ漁獲量（実線は平年値）

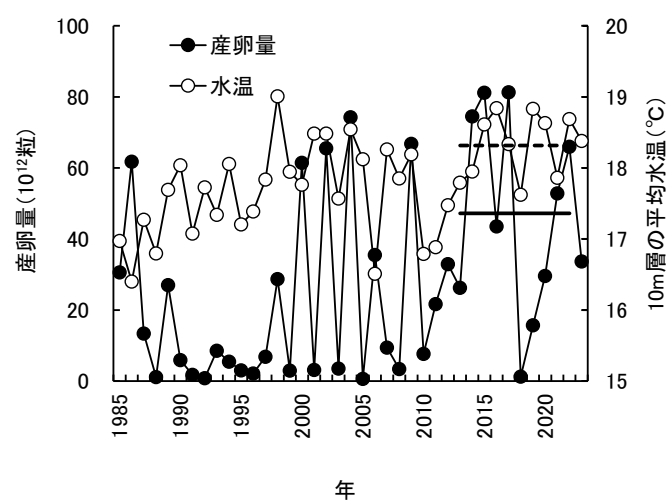


図5 播磨灘における6月の産卵量と10m層の平均水温（実線は産卵量、点線は10m層の平均水温の平年値）

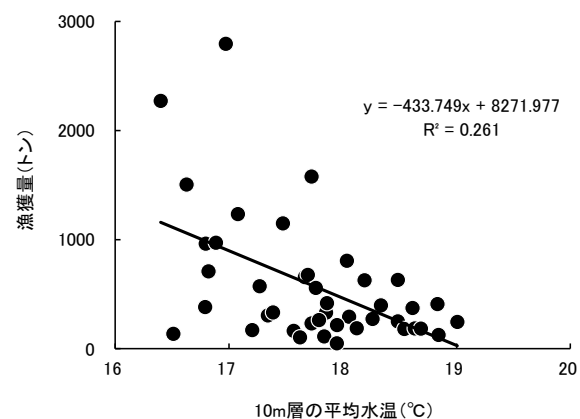


図6 播磨灘の6月における10m層の平均水温と播磨灘東部の標本漁協におけるシラス漁獲量の関係

参 画 機 関

和歌山県水産試験場	香川県水産試験場
地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産技術センター	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
兵庫県立農林水産技術総合センター 水産技術センター	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
岡山県農林水産総合センター水産研究所	